

副助詞ダケとバカリについて

2005（平成17）年入学

言語学・応用言語学専攻

1LT05064E

下東晃子

2009（平成21）年1月提出

<要旨>

同じように限定を表すと考えられる副助詞ダケとばかりでも、文脈によっては両者の容認度が変わってくる。本論文の目的はこの制限の要因を明らかにすることである。

ダケ文・ばかり文に分け、両者に言い換えが可能か否かに視点をおいて分析を行い、その結果をもとにそれぞれの特徴を明確にした。ダケが、取り立てた対象物に限定するという中心意義がぶれずに、単に限定を表す副助詞と解釈されるのに対し、ばかりには先行研究で示されたように「夾雑物の許容性」、「複数性の制限」、「反復」、「存在」というダケにはない特徴が多い。本論文では、ばかりの特徴についてこれらの他に「マイナス感情を含む」という特徴を示し、その点も含めて「NP₁ {だけ/ばかり} のNP₂」文、人物を形容する文、依頼文、許可文といった、従来の研究では特に言及されてこなかった特殊な文型について、ダケ/ばかりの生起制限の要因が何であるかという問題について解決を試みた。

<目次>

1. はじめに	1
2. 限定を表す「ダケ」	2
2.1. バカりに言い換えが可能なダケ文	2
2.2. バカりに言い換えが不可能なダケ文	3
2.3. 数量詞+ダケ	4
3. バカリ	5
3.1. 「行為の繰り返し」を表すバカリ文	6
3.1.1. ダケと言い換え不可能なバカリ文1：*形容詞述語-バカリ	7
3.1.2. ダケと言い換え不可能なバカリ文2：*-テ+ダケ	8
3.1.3. 「行為の繰り返し」におけるマイナス感情	9
3.2. 「複数の存在」を表すバカリ文	9
3.3. 「行為の繰り返し」「複数の存在」における夾雑物	10
3.4. 行為の繰り返しでも複数の存在でもないバカリ	11
3.5. 数量詞+バカリ	12
4. ダケとバカリの比較	13
4.1. ダケとバカリの特徴	13
4.1.1. ダケの特徴	13
4.1.2. バカリの特徴	13
4.2. 人物を形容する場合	13
4.3. 「NP ₁ {だけ/ばかり} の NP ₂ 」文	15
4.4. 依頼文	17
4.4.1. 三つの仮説	18
4.4.2. 考察	19
4.5. 許可文	21
5. まとめ	22

1. はじめに

日本語において、限定を表す副助詞には「～しか」「～だけ」「～ばかり」などが挙げられる。シカはその後ろに「～ナイ」という否定語を伴う必要があるが、ダケとバカリについてはそのような文法的な制限はないので、両者は同じ意味として言い換えが可能であると思われる。例として以下のような文が考えられる。

- (1) a. 私だけが損をしている気がします。
- b. 私ばかりが損をしている気がします。

しかし、文によってはダケとバカリとで言い換えを行うと(2)のように意味的な差異が生じるものや、(3)、(4)のようにダケ/バカリどちらか一方のみが使える場合がある。

- (2) a. あなたが好きなものを二つだけ持ってきて下さい。
- b. あなたが好きなものを二つばかり持ってきて下さい。
- (3) a. みんなの秘密を知っているのは私だけです。
- b. *みんなの秘密を知っているのは私ばかりです。
- (4) a. *花子はいつも泣いてだけいる。
- b. 花子はいつも泣いてばかりいる。

本論文の目的は、(2)-(4)のようなダケ/バカリの違いが何を要因として生じているのかを明らかにすることである。その際、どういう場合にバカリ/ダケに言い換えることができるかに着目し、第2章ではダケの文を、また第3章ではバカリの文をそれぞれ考察する。第2、3章を踏まえ、第4章でダケ/バカリそれぞれの特徴を明らかにした上で、ダケ/バカリの容認度の違いの原因について分析していく。なお、同じように限定を表す副助詞ノミについては、ノミがやや古語的であること、ノミの分布がほぼダケに包括されることを考慮し、本論文では扱わない¹。

¹ 本論文で扱った例文(ダケ文・バカリ文)をノミに言い換えて分析を行った結果、ノミは名詞以外に接続することなく、ノミ文が適切文となる例文はすべてダケに言い換えた場合にも適切となった。また、ダケに言い換えが不可能なバカリ文は、ノミに言い換えることもできなかった。奥津・沼田・杉本(1983)も、話し言葉ではダケがノミの代わりを果たし、現代語ではノミの意味、機能の範囲はダケに侵食され、ダケの意味、機能とほぼ一致すると指摘している。

2. 限定を表す「ダケ」

副助詞「Xダケ」は、ある事柄について、Xに限定しそれ以外は該当しないという意味を持つ。もともとダケは名詞「丈」に由来し、ものごとの限度を意味している。叙述対象の範囲をある限度で区切り、その限度までの部分のみを取り出し問題とする意識があり、よってダケの中心意義は「限定」である、と森田(1989)は述べている。

森田(1989)はダケやバカリなどの助詞について、文型を細かく分類しそれぞれの意味を説明したものであるが、本論文は文型の分類そのものが目的ではない。また、森田(1989)は分類に留まり、その要因についての考察が十分になされていない。

2.1. バカりに言い換えが可能なダケ文

森田(1989)は、限定を表すダケ文について、バカりに言い換えができるものとして(i)「……だけが……する」文型、(ii)「……するの(こと・もの・ところ)は……だけだ」文型、(iii)「……だけでない/だけではなく……」形式の三つの形を挙げ、これらはダケ文とバカリ文で意味もさほどずれないと指摘している。

(5) 「……だけが……する」

- a. 皆の目だけが光っていた。 壺井栄『廊下』 [森田(1989): p.632]
- b. 山田さんの発言だけが注目されていたので悔しかった。
- c. いつも私だけが損をしている。
- d. その映画は小学生だけが観に来ていた。
- e. 昨日の会議は山田さんだけが発言していた。

(6) 「……するの(こと・もの・ところ)は……だけだ」

- a. 今眠ることができるのは、死んだ人間とこの女だけだ。 坂口安吾『白痴』 [森田(1989): p.632]
- b. 机の上に置いてあるのは、鉛筆と消しゴムだけです。
- c. みんなの秘密を知っているのは私だけです。
- d. 今年の新入部員は女子だけだ。

(7) 「……だけでない/だけではなく……」

- a. 着物だけではない。手提げも荷物も水浸しだ。 井伏鱒二『集金旅行』 [森田(1989): p.633]
- b. その週刊誌の記事は、事実と異なるだけでなく更に悪く書いている。
- c. 太郎は、パスタの美味しい店を紹介してくれただけでなく奢ってくれた。
- d. 太郎だけでなく次郎までもが私を責める。

- e. 脳トレゲームは楽しいだけでなく、ためにもなる。

ところが、森田(1989)がバカリと言い換え可能なものとして挙げた(5),(6),(7)のタイプ以外でも、バカリに言い換えができるダケ文は多い。以下に例文を挙げる。

- (8) a. 太郎はいつも調子のいいことだけ言って何もしてくれない。
b. 太郎はいつも調子がいいことを言うだけで何もしてくれない。
c. 一郎の話信じて損するだけだよ。
d. 彼は自分の秘密を、僕と君にだけ教えてくれるよね。
e. 彼は自分の秘密を、君と僕だけには教えてくれるよね。
f. そのことについて次郎だけを責めるのはよくないよ。
g. (参考書を指して) それだけやっても成績は上がらないよ。
h. 私の父は日曜日でも仕事だけして、どこにも連れて行ってくれない。
i. 太郎は 500 円玉だけ持っている。
j. 今日は試験だから鉛筆だけ持って来ました。
k. 昨日花子はスーパーで、チョコ菓子だけ買っていた。
l. 黄色の絵の具だけ使って絵を描く画家
m. 今度だけは許せない！
n. タバコは体に悪いと分かっているが、これだけは止められない。
o. 何でも言うことを聞くから、それだけは許してほしい。
p. 庭を走り回るのが大好きなポチも、雨の日だけはおとなしくしている。
q. 山田さんは、私が何も聞いても「分からない」とだけ答える。
r. 今日最初のお客さんは女性だけのグループだった。
s. 誕生日の準備も終わって、あとは太郎の帰りを待つだけだ。
t. 太郎を待っていても、お腹がすくだけで良いことがない。
u. 花子は何も言わずに泣くだけだった。

2.2. バカリに言い換えが不可能なダケ文

また森田(1989)は、バカリに言い換えができないダケ文のタイプとして、(i)形容動詞述語の文と(ii)「NP₁ダケのNP₂」を挙げている。

形容動詞述語の文

- (9) a. この母には幸福だけが必要なのである。 [森田(1989): p.633]
b. 今は夜中だから静かなだけで、昼間は上の階の住人がうるさいんですよ。

- c. 彼女は顔を整形しているからきれいなだけだ。

「NP₁ ダケの NP₂」

- (10) a. こんな奇怪な感覚は私だけのことだろうか。 [森田(1989): p.633]
b. *こんな奇怪な感覚は私ばかりのことだろうか。
- (11) a. 博多弁だけの特徴
b. *博多弁ばかりの特徴
- (12) a. ドコモだけの新サービスが羨ましいです。
b. *ドコモばかりの新サービスが羨ましいです。
- (13) a. ここだけの話、直子は博司が好きらしいよ。
b. *ここばかりの話、直子は博司が好きらしいよ。
- (14) a. このことは僕と君だけの秘密だよ。
b. *このことは僕と君ばかりの秘密だよ。
- (15) a. 水曜日に 1000 円で映画が見られるのは、女性だけの特権だ。
b. *水曜日に 1000 円で映画が見られるのは、女性ばかりの特権だ。

森田(1989)は、このようにバカリと言い換え不可能なダケ文の文型を分類しているが、これらの文型がなぜバカリと言い換え不可能なのかについての説明が不十分である。

また、(ii)の「NP₁ ダケの NP₂」に関しては、森田(1989)は、修飾語(NP₁)が被修飾語(NP₂)の**所属物**である関係ではバカリに言い換えができるが、修飾語(NP₁)が被修飾語(NP₂)を**所有する**関係ではバカリに言い換えができないと指摘し、(16),(17)のような言い換え可能な例も挙げている。

- (16) a. 枯木のないところは赤土と枯草だけの空地^{あきち}の野原である。 [森田(1989): p.633]
b. 枯木のないところは赤土と枯草ばかりの空地の野原である。
- (17) a. 今日最初のお客さんは女性だけのグループだった。
b. 今日最初のお客さんは女性ばかりのグループだった。

しかし森田(1989)では、「NP₁ ダケの NP₂」において、修飾語 (NP₁) が被修飾語 (NP₂) を所有する関係が成り立つ時になぜバカリと言い換えできないか、原因には言及していない。本論文では、第4章でその説明を行う。

2.3. 数量詞+ダケ

森田(1989)は、数量詞にダケを接続した場合も限定を表すが、数量詞の種類によってその意味は若干異なると述べている。まず、ダケが金額や時間を表す表現に接続する場合、「100 円、200

円、300 円…」と単位的なもので計って、それを 1000 円という数値で区切り、“そこが許されるぎりぎりの限界であって、それ以上ではない”という意識の上に立っている、と指摘している。

- (18) a. 給料日前でお金がない博司に 1000 円だけ貸した。
b. 時間がないけど 10 分だけ待ってあげるよ。

他方、ダケが金額や時間を表す表現以外のものに接続する場合、“とりたてられる数量詞とその他を対比して、他者を排除して自者のみに限定”する排他意識が出てくるとしている。

- (19) a. あなたが好きなものを二つだけ持ってきてください。
b. あなたが好きな本を一冊だけ選んで下さい。
c. ちょっとだけネタバレするのは問題ないですよ。
d. 太郎に少しだけ映画の結末を言ってしまった。

「数量詞+ダケ」についても、限定を表すダケ文であるが、3.5.節「数量詞+バカリ」との対比を分かりやすくするため 2.1.節、2.2.節と区別した。なお、数量詞に接続するダケ/バカリの解釈については 3.5.節で説明する。

3. バカリ

本章では、どういう場合にバカリ/ダケに言い換えることができるかに着目し、バカリ文の考察をする²。従来、「限定」を表すバカリがダケと異なる特徴として、以下のことが指摘されてきた。

- (20) a. バカリがとりたてる自者名詞句は、その指示対象が複数存在しなければならない。
b. バカリ文の解釈は二つに分けられる³。
c. 形容詞、形容動詞などの状態性述語とは共起しにくい⁴。

² バカリには、「限定」「およその程度」「比喩」など多様な意味があり、その解釈は前後の文脈などによって異なる。

- (i) a. 早いばかりが能ではない。 (限定)
b. 生徒五十人ばかりを連れて行く。 (およその程度)
c. 憎らしいばかりの出来 (比喩)
d. 雲つくばかりの大男 (例示・比喩) [森田(1989): p.934-935]

³ ダケとは異なり、バカリに二つの解釈があることは、寺村(1991)と山中(1993)にそれぞれ指摘がある。

- (i) 寺村(1991): 単複に関わらず〈いつも〉/複数のものについて〈すべて〉 (寺村(1991:177-8))
(ii) 山中(1993): 時間的複数解釈/空間的複数解釈 (山中(1993:117))

本論文では、(20)の特徴を指摘している茂木(2002)の議論に基づいて考察する。茂木(2002)は、ダケには見られないバカリの特徴(20a)を「複数性の制限」として規定している。そして、バカリ文の解釈に関して、コトを取り立てて多回の反復を表すものを「反復の解釈」、モノを取り立てて一時点の空間に複数のモノがあることを表すものを「存在の解釈」と定義している。これらの特徴を示す例文として、茂木(2002)はそれぞれ以下の文を挙げている。

「複数性の制限」

- (21) {男/*僕} ばかりが暮らすアパート [茂木(2002): p.173(3)]
「僕」という複数存在しえないものはバカリでとりたてることができない。

「反復」

- (22) 僕ばかりが廊下に立たされた。 [茂木(2002): p.173(4a)]
「廊下に立たされる」というデキゴトが複数回起こる。

「存在」

- (23) 冷蔵庫にはビールばかり入っている。 [茂木(2002): p.173(4b)]
冷蔵庫という一時点の空間に複数の「ビール」が存在する。

本論文においては、分かりやすいように茂木(2002)における「反復」を「行為の繰り返し」、
「存在」を「複数の存在」と呼ぶことにする。

3.1. 「行為の繰り返し」を表すバカリ文

あるデキゴトや事物に限定し、その限定された行為が繰り返されるという意味のバカリ文には以下のようなものがある。

- (24) a. 太郎はいつも調子のいいことを言うばかりで何もしてくれない。
b. 太郎はいつも調子のいいことばかり言って何もしてくれない。
c. 一郎の話信じてても損するばかりだよ。
d. 山田さんの発言ばかりが注目されていたので悔しかった。
e. 彼は自分の秘密を、僕と君にばかり教えてくれるよね。
f. いつも私ばかりが損をしている。
g. 昨日の会議は山田さんばかりが発言していた。

⁴ ダケとは異なり、バカリが形容詞、形容動詞などの状態性述語とは共起にくい点は、杉本(1992)、山中(1993)、沼田(2000)などで指摘がある。

- h. そのことについて次郎ばかりを責めるのはよくないよ。
- i. 山田さんは、私が何を聞いても「分からない」とばかり答える。
- j. (参考書を指して) そればかりやっても成績は上がらないよ。
- k. 私の父は日曜日も仕事ばかりしていて、どこにも連れて行ってくれない。
- l. 弘美の服の色は、いつ見ても赤ばかりだ。
- m. 弘美は赤い服ばかり着ている。
- n. 毎日テレビゲームばかりしないで勉強しなさい!
- o. 甘いものばかり食べていたら健康に悪い。
- p. 私の料理ばかりが評判がよかったのでうれしかった。
- q. 山田さんは、私が何も聞いても「分からない」とだけ答える。
- r. 由美子のブログには仕事の愚痴ばかり書いてあった。

3.1.1. ダケと言ひ換え不可能なばかり文1 : *形容詞述語-ばかり

2.2節では、ばかりに言ひ換えることができないダケ文として(9)の形容動詞述語の文を挙げた。茂木(2002)では、形容動詞述語にばかりが付加した文に限らず、存在動詞を除いた状態性述語(形容詞、形容動詞、可能動詞等)や否定辞にばかりが付加した場合でも、ばかり文は成立しにくいことを指摘している。

- (25) a. 彼女は顔を整形しているからきれいなだけだ。
- b. *彼女は顔を整形しているからきれいなばかりだ。
- (26) a. 太郎の取り柄は頭がいいだけだ。
- b. *太郎の取り柄は頭がいいばかりだ。

これらの述語にばかりが付加する場合、容認できなくなるのはそれらの述語が「行為」を表さないために、ばかりが付加しても「行為の繰り返し」として解釈できないからである。実際、茂木(2002)によると、(27)のようにコピュラ文⁵や形容詞、形容動詞文でも、実質的に動詞相当の内容として解釈可能である場合は、ばかりと言ひ換えが可能となる。

- (27) a. (ゲームの中で) 私だけ鬼だ。
- b. (ゲームの中で) 私ばかり鬼だ。 [山中(1993): p.115]
- (28) a. 選挙活動のスピーカーだけがやたら^{やかま}喧しい。
- b. 選挙活動のスピーカーばかりがやたら^{やかま}喧しい。 [杉本(1992): p.91]

⁵ コピュラ文とは、「AはBだ。」という文型のことであり、英語の be 動詞文に相当する。

3.1.2. ダケと言ひ換え不可能なバカリ文2 : *-テ+ダケ

「-テイル」形との共起可能性に関して、ダケとバカリで違いが見られる。バカリは、「…てバカリいる」のように述語と-テイルの間に挟むことも、「…ているバカリ」のように-テイルに後続させることも可能である。ところが、ダケは「花子は泣いているだけだ。」のように-テイルに後続させることはできるが、「*花子は泣いてだけいる。」のように-テイルの間に挟むことはできない。

- (29) a. 花子は泣いてばかりいる。
b. 花子は泣いているばかりだ。
- (30) a. 休みの日はゴロゴロしてばかりいる。
b. 休みの日はゴロゴロしているばかりです。
- (31) a. 母は誰も手伝わないので怒ってばかりいた。
b. 母は誰も手伝わないので怒っているばかりだ。
- (32) a. *花子は泣いてだけいる。
b. 花子は泣いているだけだ。
- (33) a. *休みの日はゴロゴロしてだけいる。
b. 休みの日はゴロゴロしているだけです。
- (34) a. *母は誰も手伝わないので怒ってだけいた。
b. 母は誰も手伝わないので怒っているだけだった。

ところで、「-テイル」を含むダケの文においては、また別の制限が見られる。以下の例で示されるように、ダケがヲ格に付加すると容認できなくなるのである。

- (35) a. *オオカミ少年は嘘をついてだけいたので、誰も彼を信用しなくなった。
b. オオカミ少年は嘘をついているだけだったので、誰も彼を信用しなくなった。
- (36) *オオカミ少年は嘘だけついていたので、誰も彼を信用しなくなった。

ただこれについては、「嘘をつく」という表現がやや慣用的になっていることが影響していると考えられる。「嘘をつく」の動詞「つく」はヲ格をともなって使うことはあまりない。例えば「餅をつく」などの表現もあるが、「餅をつく」と「嘘をつく」の動詞は同じ行為を表すものではない。このように、動詞の目的格が既に限定されているにもかかわらず、ダケを使うことによって「嘘以外はつかないが」という不必要な否定の意識が付け加えられてしまうことが、不適切

文となる要因である。

3.1.3. 「行為の繰り返し」におけるマイナス感情

ダケに言い換えができるかどうかに関わらず、このように行為が複数回繰り返される文については、話し手が相手（その他）に対して「またかよ…／またなの!？」というようにうんざりしているような、若干のマイナス感情を持っていると思われる。

- (37) a. 昨日の会議は山田さんばかりが発言していた。
b. 弘美は赤い服ばかり着ている。

(37)のように、行為の繰り返しを表す文では、話者のマイナス感情がうかがえる。(37a),(37b)ともに文自体に直接的に嫌な気持ちを表す言葉はないが、(37a)については、「また山田さんか…」といった気持ちが、(37b)については「弘美の服はまた赤かよ!？」といったマイナス感情を持っているという印象を聞き手に与える。

しかしながら、繰り返しを表すばかり文のすべてに話し手のマイナス感情が含まれるのだろうか、という疑問も残る。例えば、次の三つの文ではどうなるか。

- (38) a. 私ばかりが幸せな思いをしています。
b. この頃ラッキーなことばかりが起こる。 [茂木(2002): p.172]
c. 私の料理ばかり評判がよかったのでうれしかった。

これらの文は一見して話し手のマイナス感情が含まれていないように思われる。しかし、(38a)は「私ばかりが良い思いをして悪いなあ…」と言ったへりくだった感情が、(38b)は「ラッキーなことが起こりすぎて、後で悪いことが起こるんじゃないだろうか…」といった不安がその文の裏に隠れている。(38c)は「うれしかった」とあることから、話し手にはマイナス感情がないにしても、聞き手にとっては良い印象を受けない。これは(38a)、(38b)にも共通している。つまり、ばかりには文脈によって話し手のものか、聞き手のものかの違いはあるが、マイナス感情を暗に含んでいると言える。

3.2. 「複数の存在」を表すばかり文

以下の例文の「Xばかり」は、行為の繰り返しという意味はなくXが複数存在するという意味になる。

- (39) a. 机の上においてあるのは、鉛筆と消しゴムばかりです。

- b. 太郎は 500 円玉ばかり持っている。
- c. 今日は試験だから、鉛筆ばかりを持ってきました。
- d. その映画は小学生ばかりが観に来ていた。
- e. 昨日花子はスーパーでチョコ菓子ばかり買っていた。
- f. 弘美のダンスに入っている服の色は赤ばかりだ。
- g. 役所の職員は馬鹿ばかりだ。
- h. 今年の進部員は女子ばかりだ。
- j. 世界はこわいのばかりなの？（映画「悪夢探偵 2」）
- k. 部長からのメールには明日の会議で重要なことばかり書いてあった。
- l. *あの老人にとって、孫の花子ばかりが生きがいだ。
- m. *母の書置きには 6 時に帰ることばかり書いてあった。

ある事柄に該当するものが X に限定されることを意味する。この場合、バカリの複数性の制限から、バカリの前にくる名詞は複数のものでなければならない。(39l)は、花子が複数という解釈ができないので不適切文になる。(39m)「6 時に帰ることばかり書いてあった」では、「6 時に帰ります」といったような文章が一枚の書置きに複数書かれていることになり、不自然になる。よって複数であっては不自然なものにバカリは接続できない。複数の存在を表すバカリ文はダケに言い換えることができる。

3.3. 「行為の繰り返し」「複数の存在」における夾雑物

ダケ文とバカリ文の違いとして顕著なのは、「Xダケ/バカリ」における X 以外のもの（夾雑物；あるものの中にまじりこんでいる余計なもの）の許容性である。

- (40) a. 机の上に置いてあるのは鉛筆と消しゴムだけです。
 b. 机の上に置いてあるのは鉛筆と消しゴムばかりです。

(40a)のダケ文では、「鉛筆と消しゴムだけ」という表現で、鉛筆 1 本、消しゴム 1 個のときも言えるし、鉛筆 100 本、消しゴム 100 個のときも問題なく言える。しかし、そこに色ペンが 1 本加えられると文が成り立たなくなってしまう。一方、(40b)のバカリ文では「鉛筆と消しゴムばかり」という表現で、複数性の制限が影響するため鉛筆 1 本、消しゴム 1 個のときには使えないが、鉛筆 100 本、消しゴム 100 個に色ペンが 1 本あっても問題ない。これは、ダケが夾雑物を許容することができない一方で、バカリが夾雑物を許容するからである⁶。

同じことが、「行為の繰り返し」を表すバカリ文でも言える。

⁶ このように、夾雑物の許容性についてダケとバカリが異なるということは、既に多くの先行研究において指摘されている（[菊地(1983): p.59]、[杉本(1992): p.4]、[沼田(1992): p.43]を参照）。

(41) 甘いものばかり食べていたら健康に悪い。

(41)は、「甘いものを食べる」という行為について、「甘いもの」以外のものを食べていても問題がない。(41)のように発言したとしても、「甘いもの」以外のものを一切口にしないということとは考えにくい。甘いもの以外にもいくらか食べていても、全体として甘いものを多く摂取しているという状況を想定している。ところが、ダケ文にすると解釈が異なってくる。

(42) 甘いものだけ食べていたら健康に悪い。

(42)のように(41)のバカ리를ダケに言い換えると、食べるものが「甘いもの」にのみ限定され、「甘いもの」以外のものを食べることを許容しない。このように、ダケが夾雑物を含むことを許容しないので、文脈によっては夾雑物があつて当然と思われる場合には、ダケに言い換えができたとしても、バカ리를好んで使うようになる。

3.4. 行為の繰り返しでも複数の存在でもないバカリ

「行為の繰り返し (3.1.節)」、「複数の存在 (3.2.節)」のどちらにもあてはまらないバカリ文も存在する。

- (43) a. 太郎ばかりでなく次郎までもが私を責める。
b. 脳トレゲームは楽しいばかりじゃなくて、ためにもなる。
c. その週刊誌の記事は、事実と異なるばかりか更に悪く書いている。
d. 太郎は、パスタの美味しい店を紹介してくれたばかりでなく奢ってくれた。
e. あの店は日曜日ばかりでなく水曜日も休みのようだ。

(43)は 2.1.節(7)の「……だけでない／だけでなく……」形式の文をバカリに言い換えたものである。ただし、(43c)のようにバカリには「…ばかりでなく」とまったく同じ意味を持つ「…ばかりか」という表現もある。前述したように、森田(1989)は、2.1.節(7)はバカリに言い換えることが可能で意味もさほど変わらないと指摘している。ここで注目したいのは、バカリに言い換えても意味がずれないとした三つの文型(5)-(7)のうち、(7)が(5),(6)とは異なり、バカリに言い換えたときに「行為の繰り返し」、「複数の存在」のどちらの解釈にも当てはまらないということである。

(43a)、(43e)を同じ内容として次のように言うことができる。

- (43) a'. 太郎ばかりが私を責めるのではなく、次郎までもが私を責める。

e'. あの店は日曜日ばかりが休みでなく、水曜日も休みのようだ。

(43a')は「太郎が私を責める」行為が繰り返されることになり、(43e')では「日曜日に店を休む」行為が繰り返されることになり。しかし、(43a)については「太郎が私を責める」行為はほとんどの人が一度だけであると解釈するであろう。(43c),(43d)については、かえって「行為の繰り返し」解釈が難しい。よって、(43)はダケに言い換えた文と意味の違いがない。

(44)は限定の意味を持ちながら、述語が特にXのみに該当するということを強調した表現であり、これも(43)と同様にダケに言い換えた文とほとんど意味に違いがない。

- (44) a. 今度ばかりは私も許せない！
b. タバコは体に悪いと分かっているが、こればかりは止められない。
c. 何でも言うことを聞くから、そればかりは許してほしい。
d. 庭を走り回るのが大好きなポチも、雨の日ばかりはおとなしくしている。

Xを強調するバカリ文は「Xばかりは…だ」という文型のみであり、また対象となるXは名詞の場合に限られる。

3.5. 数量詞＋バカリ

このように数量詞にバカリが接続すると、金額や時間といった数量詞自体の種類に関わらずすべての文で限定の意味はなくなる。この場合、「おおよそ～くらい」といった漠然とした数量の程度を表す文になる。これは多くの先行研究で指摘されている。(森田(1989)、定延(2003)等)

- (45) a. 給料日前でお金がない博司に 1000 円ばかり貸した。
b. 時間がないけど 10 分ばかり待ってあげるよ。
c. あなたが好きなものを二つばかり持ってきてください。
d. ??あなたが好きな本を一冊ばかり選んで下さい。
e. ちょっとばかりネタバレするのは問題ないですよ。
f. 太郎に少しばかり映画の結末を言ってしまった。

もともとバカリは動詞「計る／測る／量る」から由来するので、数量詞に接続するときには限定ではなく数量の程度を表す意味になるのは当然である。

しかし、同じような数量詞でも、(45d)の「一冊ばかり」のように、一つのものにバカリをつけて「だいたい一冊くらい」、「一、二冊」というように解釈しようとするとう違和感を覚える。話者が数量の幅を示して「～ばかり」と言うときには、対象とするものが一つだけではなく複数あ

るということを前提としている。対象とするものが一つであれば、バカリをつけて範囲を推し量る必要もなく、ダケを使うか、単に「一冊」と言えばよい。そのため、バカリを使って数量の程度を表すときには、二つ以上の数量詞でなければならず、一つのものに接続する文が不自然になってしまう。

4. ダケとバカリの比較

4.1. ダケとバカリの特徴

第2章と第3章でダケ/バカリの文について、それぞれ整理してきた。ダケとバカリとを言い換えることによって文の容認度に違いが生じ、その点に注目することでそれぞれを特徴づけられたと思われる。そこで、本節ではまず、第2章および第3章を踏まえたうえでダケとバカリの特徴を整理したい。

4.1.1. ダケの特徴

ダケは限度を表す「丈」から由来するため、「対象となる部分を取り出して、Xに限定しそれ以外は該当しない」という限定の中心意義はぶれない。よって、限定を表す文脈において、ほぼすべての文でダケは使えるが、動詞-テ形には後続できないという構文上の制限がある。また、バカリと異なり、取立てられるX以外の夾雑物を許容できないため、限定が厳密になる。

4.1.2. バカリの特徴

バカリはダケと異なり、限定以外にもさまざまな意味を含む。「計る／測る／量る」から由来するため、数量詞に後続する文では、ダケ文が限定を表すのに対して、おおよその程度を表すようになる。限定を表す文については、バカリ自体に要素の数の多さ、ある集合における割合・頻度の高さといった量的解釈を伴う性質がある[茂木(2002): p.173]ことから、ほとんどの場合「行為の繰り返し」、または「複数の存在」のいずれかの特徴を有する。また、ダケとの大きな違いとして、取り立てられるX以外の夾雑物も許容されるという特徴と、量の多さ、頻度の高さに対するマイナス感情を含むという特徴が挙げられる。

さらに「行為の繰り返し」に解釈するためには、作用・動作・行為・存続などを表す述部が、「複数の存在」と解釈するために存在を表す述部が必要となる。

4.2. 人物を形容する場合

ある人物について、「人物集合 A は…(な人)に限定される」ということを示す内容の文では、ダケ・バカリの容認度に違いが生じる場合がある。(46a)のように、「～は女子だけだ。」は言えるが、(47)のように「人物を形容する名詞+だけだ」は不適切文になる。ところが、ダケ文が不適切なこれらの文もバカリ文では適切になる。

- (46) a. 今年の新入部員は女子だけだ。
 b. 今年の新入部員は女子ばかりだ。
 c. 弘美が好きになるのは長髪の人だけだ。
 d. 弘美が好きになるのは長髪の人ばかりだ。
 e. 山田さんの同期は長崎出身だけらしい。
 f. 山田さんの同期は長崎出身ばかりらしい。
- (47) a. *僕の周りの友人は天才だから自分が惨めになる。
 b. 僕の周りの友人は天才ばかりだから自分が惨めになる。
 c. *役所の職員は馬鹿だけだ。
 d. 役所の職員は馬鹿ばかりだ。
 e. *花子のクラスの男子はイケメンだけだ。
 f. 花子のクラスの男子はイケメンばかりだ。

(47)の文でダケが不適切になるのはなぜなのだろうか。ここで最初に考えられるのが、それぞれの集合において、全員が「天才」「馬鹿」「イケメン」であるという事実自体が不自然だからではないのかということである。しかしながら、ダケ・バカリと同じように限定を表す「～シカ…ナイ」に言い換えた三つの文(48)はすべて適切文となる。(副助詞シカの構文上、一部で助詞「に」を付け加える必要がある。)

- (48) a. 僕の周りの友人は天才しかいないから自分が惨めになる。
 b. 役所の職員には馬鹿しかいない。
 c. 花子のクラスの男子はイケメンしかなくて羨ましい。

Xシカは後ろに否定語をともなって、対象物を厳密に限定し「X以外にはない」という意味なので、全員が「天才」や「イケメン」である事実の不自然さが影響するという予測は間違っていると考えられる。

では、ダケ文が不適切になり、バカリ・シカが適切文となるのは何を要因にしているのだろうか。両者を比較すると、次に考えられる要因は、バカリに含まれる「存在」という意味である。3.2節で述べたように、バカリには「複数の存在」という意味が含まれている。(46),(47)のバカリ文は、前にくる名詞によって形容される人物が複数存在することを示している。シカに言い換えた場合では、(48)のようにシカの後ろには「ある(在る)」という述語の否定がこななければならない、このことによって存在という意味が含まれるようになる。一方で、ダケは単に限定を表し、ダケ自身に「存在」の意味は含まれていない。

よって、存在の意味の有無が影響を及ぼすと考えられる。

しかしながら、それだけでは(46)のダケ文が適切文なのに(47)のダケ文が不適切になるという差異の原因は説明できない。同じように人物を形容する文であっても、ダケの容認度に差が出るのはなぜだろうか。そこで、今度は「Xダケ」のXに注目すると、(46)と(47)の違いはXであるか否かを誰もが確定できるかどうかということである。(46)は、女子であるか男子であるか、長髪か短髪か、長崎出身か否かは客観的事実として断定できることである。一方で(47)は、天才か否か、馬鹿か否か、イケメンか否かは定義によって判断できるものではなく、それぞれの人の基準によって判断されるものである。

よって、(46)のように客観的に断定できる場合は、厳密に限定するダケ文でも適切文になると考えられる。また、これら(46)のXについては、「長髪の人」「長崎出身の人」というように後ろに「人」をつけたほうが文としての自然さが増す。このように「人」をつけるとダケ自体に存在の意味がなくても、「～な人が存在する」という意味合いが出てくる。このことも含めて、(46)と(47)の違いに影響を及ぼしていると思われる。

4.3. 「NP₁ {だけ/ばかり} の NP₂」文

次に、2.2節で出てきた「NP₁ダケの NP₂」文において、バカりに言い換えができない場合について説明したい。

「NP₁バカリの NP₂ (NP₁: 修飾語、NP₂: 被修飾語)」という文において、森田(1989)の主張をまとめると以下ようになる。

- ・タイプ A: 修飾語(NP₁)が被修飾語(NP₂)の所属物である関係→バカりに言い換えが可能
- (49) a. 枯木のないところは赤土と枯草だけの空地の野原である。[森田(1989): p.633]
 b. 枯木のないところは赤土と枯草ばかりの空地の野原である。
- ・タイプ B: 修飾語(NP₁)が被修飾語(NP₂)を所有する関係→バカりに言い換え不可能
- (50) a. こんな奇怪な感覚は私だけのことだろうか。 [森田(1989): p.633]
 b. *こんな奇怪な感覚は私ばかりのことだろうか。

森田(1989)は、NP₂と NP₁の関係に着目して分類するに留まっている。タイプ B の文で、バカりに言い換えた場合に不適切となるのはなぜなのかを考えていきたい。

- (51) a. 博多弁だけの特徴
 b. *博多弁ばかりの特徴
 c. 博多弁ばかりが持つ特徴

(51a)は、修飾語(NP₁)「博多弁」が、被修飾語(NP₂)「特徴」を所有している。ここではまず、バカリの持つ「行為の繰り返し (3.1.節)」、「複数の存在 (3.2.節)」という二つの性質に着目して分析する。

(51b)は、何の行為が繰り返されるのかが分からないので、「行為の繰り返し」という解釈はできない。もし、「行為の繰り返し」であると解釈するのであれば、(51c)のように繰り返される行為を加えなければ意味が通じない。「複数の存在」についても、「博多弁」は、ある一つの方言を包括したものなので、そもそも一つ二つと数えることができないことから解釈できない。よって二つの解釈ともできない「博多弁ばかりの特徴」は不適切となるのではないかと考えられる。(50b)についても同様に、「行為の繰り返し」という解釈ができない上に、「私」は複数存在するものではない。

ところが、次の例文ではどうだろうか。

- (52) a. 水曜日に 1000 円で映画が見られるのは、女性だけの特権だ。
b. *水曜日に 1000 円で映画が見られるのは、女性ばかりの特権だ。

(52b)も修飾語(NP₁)「女性」が被修飾語(NP₂)「特権」を所有しているためにバカリ文が不適切になっているが、(51)とは異なり、NP₁の「女性」は「複数の存在」という解釈が可能である。よって、バカリの二つの解釈に当てはまらないからという理由でバカリに言い換えができない、と言うことはできない。

そこで次に考えられる要因は、4.2.節と同じくバカリに含まれる「存在」という意味である。このことについて、茂木(2002)は、両者の文の助詞「の」の述語的解釈の有無に注目して考察している。

茂木(2002)は、ダケやバカリなどのとりたて詞⁷には、基本的に何らかの述部要素と関係を結ぶという特性があることを指摘し、この特性を「呼応」としている。とりたて詞を含むすべての文で、呼応する述部要素が形態的に確認できるとは限らないが、バカリの「NP₁のNP₂」文では確認できる。

- (53) a. 学生 {だけ／ばかり} の部屋 の：存在動詞相当 [茂木(2002): p.182]
b. 学生 {だけ／*ばかり} の権利 の：属格

(53a)の「の」は存在動詞に相当し、(53b)の「の」は属格を表す助詞である。つまり、(53a)は

⁷ とりたて詞：文中の種々な要素（自者）をとりたて、これに対する他の要素（他者）との論理的関係を示す語 [奥津・沼田・杉本(1983:108)]

「学生がいる部屋」、(53b)は「学生のものである権利」という意味であり、この点については森田(1989)の分類と共通する。(53)の例は、バカリの生起可能性が「の」の述語的解釈の有無に影響されていることを示している。限定を表す意味的にはバカリを使っても問題がないように思われるが、バカリが文中に現れるためには、適切な述語的要素と呼応する必要があると茂木(2002)は指摘している。

以上のことから、バカリには述部の要素という形式的な制限があり、「NP₁ {だけ/ばかり} の NP₂」文でダケとバカリの言い換えに存在を意味する述部が必要であるといえる。

ここで注意しておきたいのが、バカリの「存在」という意味が影響しているのならば、(53b)の「学生ばかりの権利」も「学生」が「複数の存在」という解釈ができるので、矛盾が生じるのではないかという点である。しかし、「学生ばかり」までの時点では複数の学生が存在するという解釈ができるが、後ろに「権利」という名詞がきた時点で、学生が権利に所属し存在するという解釈ができなくなってしまう。つまり、バカリが呼応する「存在」という意味は、述語要素が持っていなければならないのであって、単に NP₁ が「複数の存在」であるということではない。(51c)のように、バカリに言い換えができない「NP₁ ダケの NP₂」文における、補足された述部(「持つ」)が存在を表すものではないことから、述部要素の持つ「存在」の意味が影響しているといえる。

4.4. 依頼文

相手に「～してほしい」と伝える依頼文では、ダケとバカリで容認度に差が出る。ダケを使って「Xダケ～してほしい」という文は、問題なく適切文となり、相手にXのみを依頼し、それ以外はしないでほしいという意味になる。

- (54) a. 赤いリボンだけ切って下さい。
b. 赤いリボンだけ切るようにして下さい。
c. 赤いリボンだけ切らないで下さい。
d. 健康のために野菜だけ食べて下さい。
e. 健康のために野菜だけ食べるようにして下さい。
f. 野菜だけ食べないで下さい。

ところが、バカリを使った場合はどうなるか。(54a)に対応する(55a)の文では違和感を覚えるがどうしてだろうか。

- (55) a. ??赤いリボンばかり切って下さい。
b. 赤いリボンばかり切るようにして下さい。
c. 赤いリボンばかり切らないで下さい。

- d. ?健康のために野菜ばかり食べて下さい。
- e. 健康のために野菜ばかり食べるようにして下さい。
- f. 野菜ばかり食べないで下さい。

4.4.1. 三つの仮説

- A. 夾雑物の許容可能性が影響しているのではないか？
- B. バカりに含まれるマイナス感情が影響しているのではないか？
- C. 定延(2001)によって提示されたバカリの「探索」が影響しているのではないか？

この三つの仮説について考察する前に、例文(55a)が具体的にどのような状況であるのかを設定する。

太郎の誕生日会の準備をするために友達が集まった。部屋の飾りつけ用に、さまざまな色のリボンを切らなければならない。次郎の目の前に赤、青、黄、緑、白などのリボンが全部で100本置かれている。そこで花子が次郎に、「赤いリボンばかり切して下さい。」と言った。

・仮説 A

バカりは夾雑物を許容できるので、「赤いリボンばかり」と言っても、赤いリボンに混じって他の色のリボンがいくつかあっても良い。そのため、「赤いリボンばかり切ってください。」と頼まれた次郎は、本来なら他の色のリボンも切ってもいいはずである。しかし、わざわざ指定した色のリボンを切ってほしいと頼まれた場合、たいていは指定された色のリボンのみを切るように要求されているものであると受け手は考える。そこで、受け手は他の色のリボンを切っているのか困惑する可能性が出てくることになり、そのような煩雑な状況を回避するためには「赤いリボンだけ切して下さい。」と依頼したほうが無駄がない。よって(55a)は不自然となる。

・仮説 B

「赤いリボンを切る」という行為に対して、「また赤いリボンか…」とマイナス感情を持つはずの話し手が、その行為を聞き手に依頼するという矛盾からこの文が不適切になる理由ではないかと考えられる。

また、話し手が繰り返される動作に対して「またかよ…／またあ～!？」といったマイナス感情を持つと言うには、当然その行為が既に一度は行われたという前提がなければならない。よってまだ1本も赤いリボンを切っていない次郎に対して、「赤いリボンばかり切ってください」と言うことはできない。

・仮説 C

まず、定延(2001)においてバカリ文の分析に用いられた「探索」という概念がどのようなものなのかを説明しなければならない。探索とは、「未知の空間（探索領域）はどんな様子なのか？」という問題意識（探索意識）を持って調べることである。ダケとバカリではこの探索領域が異なる。ダケの探索領域はタイプ（品種）の集合であり、バカリの探索領域は複数回の探索の集合である。例えば、「この人物が食べたのはミカンばかりだ。[定延(2001): p.128]」という文は、問題の人物が食べたモノが何なのか調べる探索が複数回あり、その探索の集合を探索領域とした探索を行った結果すべて「ミカン」という情報を得たということである。

このように、探索を行った結果としてバカリ文があるので、探索の前提となる行為を今から行うように依頼する文ではバカリが使えない。

4.4.2. 考察

まず、仮説 A についてであるが、例えば(55d)のように相手に「野菜ばかり食べて下さい。」と依頼する場合、相手が野菜以外に何も食べないということを希望することは考えづらい。話者が言わんとすることは、「野菜を多めに摂取してほしい／野菜中心に食事をしてほしい」ということであろう。したがって、話し手が初めから肉や米などの夾雑物が混じっていてもいいと思っており、受け手もそれを承知しているので、「健康のために野菜ばかり食べて下さい。」と言われた受け手が、夾雑物を許容されていることについて「野菜以外にも食べていいのだろうか？」と困惑することがない。そのために(55d)は(55a)にくらべて不自然さが軽減される。

依頼文において、夾雑物が許容されやすいと文の自然さは増すが、それでも完全に適切文になるかという疑問が残る。よって、バカリの依頼文に対する違和感を説明する根拠に、夾雑物の許容可能性が影響を及ぼすという仮説 A のみを支持することはできない。

では、残った仮説 B と仮説 C について考えてみたい。この両者に共通するのは、前提とする行為が既に行われていなければならないということである。話者がうんざりするためには、話者が発言する以前に該当行為を複数回行っていなければおかしいし、「どんな様子なのか？何をしているのか？」と探索するためにも該当行為が一度は行われていなければならない。よって、本来なら既に行っているはずの該当の行為を、まだ行っていない相手に対して、今からしてほしいと依頼することができなくなるはずである。

しかし、このまま結論づけてしまうとバカリ文において、一度も行ったことのない内容の文がすべて不適切となってしまう。

(56) 来年2月から始まるその舞台は、関東でばかり公演して九州での公演はないそうだ。

(56)のように、行為が未来に行われる文脈でも適切文になるものがある。では、なぜ(56)は適切文となるのであろうか。(56)と(55a)との違いは、(56)が探索することが可能であるという点である。(56)を探索に基づいて分析すると、「その舞台はどこで公演されるのだろうか」と調べると東京

である。2月下旬はどうだろうかと思うと埼玉である。では、3月上旬は？と思うと神奈川である。」といった複数の探索の結果、公演される場所がすべて[関東]であったということである。また、話者は探索を行いながら「また関東地域か…」 「また関東地域かよ!？」と思うことからマイナス感情を抱くことになる。

(55b)「赤いリボンばかり切るようにして下さい。」は(55a)と同様に、依頼される相手はまだ「赤いリボンを切る」という該当行為を行っていないが、(55a)とは異なり自然な文として容認できる。「赤いリボンばかり切る」と言った時点で、「何を切るのか？」と複数回探索をした結果すべて[赤いリボン]であり、「また赤いリボンか…」とマイナス感情を持った状態ができあがっている。話者はそれを承知した上で、「そういった状態になるようにしてほしい」と相手に依頼するので、不自然さが減少すると考えられる。

以上のことをまとめると、行為が既に行われていたか否かが問題ではなく、探索を行うことができるか否かがバカリ文の容認度に影響を及ぼしているといえる。話者のマイナス感情についても、単に繰り返し行われてきた行為に対してのマイナス感情だけではなく、行為が未来に行われる場合でも、未来についての探索を行いながら複数回の探索の結果が同じである過程を通じてのマイナス感情を含む。

肯定の依頼文について述べてきたが、では、次のケースではどうなるだろうか。

太郎の誕生日会の準備をするために友達が集まった。部屋の飾りつけ用に、さまざまな色のリボンを切らなければならない。弘美は自分の好きな色の赤いリボンを一心不乱に切っている。そこで花子が弘美に、「赤いリボンばかり切らないで下さい。」と言った。

このように、否定依頼文にした(55c)は自然な文に解釈することができる。

まず、仮説 B についてであるが、話者は「赤いリボンを切る」という行為にマイナス感情を持っている。そこで、相手に対してその行為をしないように依頼することはなんら不自然ではないので、「赤いリボンばかり切らないで下さい。」という否定依頼文は適切になる。次に仮説 C について考える。この文についても、探索を基に分析すると次のようになる。「弘美は何を切っているだろうか、と見てみると赤いリボンを切っている。またしばらくして、何を切っているのかと見てみるとやはり赤いリボンを切っている。」という探索が何度もあり、結果得られた情報がすべて赤いリボンだった。つまり、赤いリボンばかりを切ってしまったという既に行われた弘美の行為に対して、「赤いリボンばかり切らないで下さい。」と非難するように発言することはなんら不自然ではないのである。

もちろん、まだ一本もリボンを切っていない弘美に対して、「(今から作業を行うにあたって)赤いリボンばかり切らないで下さい。」と依頼する状況も考えられる。しかし、この状況下では

受け手が「まだ切っていないのに!？」とってしまうように、やはり不自然な文になる。

否定依頼文では、依頼主が意図することについてダケ文が2通り解釈できるのに対し、バカリ文は1通りしか解釈できない。

(57) a. [赤いリボンだけ]切らないで下さい。

依頼主の意図1：赤いリボンは切ってほしくない

b. [赤いリボンだけ切ら]ないで下さい。

依頼主の意図2：赤いリボンの他に別の色も切ってほしい

(58) a. *[赤いリボンばかり]切らないで下さい。

依頼主の意図1：赤いリボンは切ってほしくない

b. [赤いリボンばかり切ら]ないで下さい。

依頼主の意図2：赤いリボンの他に別の色も切ってほしい

(57)のように、ダケの否定依頼文では否定に係る部分が2通りに解釈できる（否定に係る部分を[]で示している）。(57a)は、依頼者の意図は「他の色のリボンは切っていいが、赤いリボンだけは切らないでほしい。」ということであり、(57b)は「赤いリボンだけを切るのではなく、他の色のリボンも切ってほしい。」ということ在意図している。このようにダケを使った「赤いリボンだけ切らないで下さい。」という依頼は二つの意味に解釈できるということが分かる。一方で、(58)のようにバカリを使った否定依頼文ではどうなるだろうか。バカリ文では、「赤いリボンばかり切るのではなく、他の色のリボンも切ってほしい。」という意味にしか解釈できない。「赤いリボンを切る」という行為の繰り返しを否定する解釈のみが可能である。

4.5. 許可文

次の文のように、話し手が相手に対してなんらかの許可を行う場合、ダケをバカリに言い換えることができない。

(59) a. 机の上に置いていいのは、鉛筆と消しゴムだけです。

b. *机の上に置いていいのは、鉛筆と消しゴムばかりです。

許可を与える文でバカリに言い換えできないのはなぜか。(59)の文は、「机の上に置いてよい」と許可されるものは鉛筆と消しゴムに限られ、その他のものは許可しないという意味になる。この点、ダケは夾雑物（鉛筆と消しゴム以外のもの）は許容しないという厳密な限定なので、問題ない。しかし、バカリ文では夾雑物が許容されることになり、そのためペンなどが含まれてもよいことになってしまう。これでは、厳密に限定すべきはずの(59)の趣旨に反するので不適切文に

なる。

このように、ある事柄について許可を与える文では、夾雑物が許容されにくくなるのでバカリが使えず、ダケ文のみが適切となるのである。

5. まとめ

一口に限定を表す副助詞といっても、それぞれの副助詞が持つ意味は異なる。ダケはバカリにくらべて、取り立てられた対象物に限定するという中心意義がぶれず、体言・用言に関わらず接続して超時的に使うことができる。しかし、動詞の-テ形には後続することはできないという構文上の制限を持つ。また、バカリと違って夾雑物を許容せず、厳密に限定するので夾雑物を許容しないと不自然になる場合ではダケ文は成立しない。もっとも、実際には夾雑物がある状況であっても、夾雑物を許容するか否かが重要でない場合は、ダケを使って限定を表すことができる。一方、バカリについてはそれ自体に「要素の数の多さ」、「集合における割合・頻度の高さ」という量的解釈がある。従来の研究で明らかにされてきたように、バカリは「夾雑物の許容性」「複数性の制限」「行為の繰り返し」「述部が存在という意味を持つ」等さまざまな特徴を持つが、本論文ではさらに「マイナス感情を持つ」という性質を示した。

これらダケとバカリの特徴をもとに、人物を形容する文・NP₁{だけ/ばかり}のNP₂・依頼文・許可文の分析を行った。「人物集合Aは…(な人)に限定される」という意味の、人物を形容する文については、ダケ文が不自然になることが多いが、これは「存在」という意味が必要になるため、それ自体に存在という意味のないダケが使えないからである。またこの場合、「形容する名詞が個人の判断基準ではなく、客観的基準によって判断できるか否か」ということがダケ文の容認度に影響を及ぼす。森田(1989)において指摘された「NP₁{だけ/ばかり}のNP₂」文の容認度の差異については、本論文では、茂木(2002)をもとに「述部が存在という意味を持つ」というバカリの特徴が影響していることを示した。また、バカリの依頼文における不自然さの要因については、定延(2001)で示された「探索」の概念に注目し、探索の可能性とマイナス感情とが複合的に影響を及ぼしていることが分かった。さらに、バカリの許可文における不自然さについては、「夾雑物の許容性」が影響しているということを明らかにした。

このように、それぞれの文において、ダケとバカリで容認度に差が出る要因は異なり、ダケ・バカリの性質が単一的あるいは複合的に影響していることが分かった。

<参考文献>

- 奥津敬一郎・沼田善子・杉本武（1983）『いわゆる日本語助詞の研究』東京：凡人社。
- 菊地康人（1983）「バカリ・ダケ」国広哲弥（編）『意味分析』：57-59. 東京：東京大学文学部言語学研究室。
- 定延利之（2001）「探索と現代日本語の「だけ」「しか」「ばかり」」『日本語文法』1(1): 111-136. 日本語文法学会。
- 定延利之（2008）『煩惱の文法—体験を語りたがる人びとの欲望が日本語の文法システムを揺さぶる話』東京：筑摩書房。
- 茂木俊伸（2002）「「ばかり」文の解釈をめぐって」『日本語文法』2(1)(2002年),pp171-189
- 杉本和之（1992）「「ばかり」と「だけ」」『中京国文学』11: 79-96. 中京大学国文学会。
- 寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』東京：くろしお出版。
- 沼田善子（1992）「とりたて詞と視点」『日本語学』11(8): 35-43. 東京：明治書院
- 沼田善子・野田尚史（編）（2003）『日本語のとりたて—現代語と歴史的变化・地理的変異—』東京：くろしお出版
- 森田良行（1989）『基礎日本語辞典』東京：角川書店。
- 山中美恵子（1993）「現象—対比—主題—その関連性の解明に向けての覚書—」『高度な日本語記述文法書作成のための基礎的研究』平成4年度科学研究費補助金総合研究(A)研究成果報告書（研究代表者：益岡隆志）』：106-135.